

Jacques Jansen のレッスンを受けて

Les leçons du Prof. Jacques Jansen

稲垣孝子

東京音楽学校に在学中、柴田先生から、Ernest・Chausson の Le temps des Lilas を課題にいただいて、伴奏を弾き始めた時の感激、何と美しい音楽だろうと、何度も何度も歌いながら私の魂は地上をはなれて、音楽と一体になり、体は喜びでふるえていた。Mélodie (フランス歌曲) との出会いである。その後古沢淑子先生が帰国され、リサイタルでみた舞台はフランスのエスプリそのものであり、Debussy のメロディは、私を夢の世界へ誘った。Ninon・Vallin, Jane・Bathori, Claire・Croiza, Charles・Panzera 等のレコードをききあさり、そのうち Jacques・Jansen のレコードを手に入れた。東京音楽学校卒業当時の話である。彼のリズムの小気味よさ、音程の正確さ、発声、Diction、すべてにわたっての完璧さに圧倒され、毎晩、彼のレコードにききいったものである。一昨年、Ravel の Chansons Madécasses を歌うことにした時、Gérard・Souzay は勿論、Dietrich・Fischer-Dieskau, Madeleine・Grey 等、世界のトップレベルの歌手のレコードをきいたが、Jansen は今更に群をぬいていた。その Jansen の名前を Poitiers 夏期音楽大学のパンフレットの中に見つけたので、期待に胸をふくらませて参加することにした。

Poitiers の生活は、朝 9 時 30 分より 12 時 30 分まで Solfège、午後 2 時から Jansen のレッスンが 5 時までつづく。彼のレッスンは発声練習から始まるのではなく、まず生徒のレパートリーをうたわせる。1 フレーズうたわないうちに、はげしく「Non」という大きな声がとんでくる。彼がモズのような鋭い声で「エ、エ」と声を出す。上顎部に声をぶつけて声帯をうすくして発声するということである。又ひと声うたう。「Non、Soulevez (上にあげる)」後頭部を上にはきあげるジェスチャーをして教える。その通りにすると声の下から上へ通り、のどがひらき、声が前にひびくということである。「体は楽器で息すなわち声は弓、もっとのばして。Soulevez」「Non」「口を開けて」「Soulevez」口の中をのぞきこみ「Soulevez」その合間を彼は一声一声うたう。彼には理屈がない。彼の歌唱のすばらしさは、69 才の今日でも少しの衰えもみせず、バスからコロラトゥールのカデンツまで、よどみなくうたう。Soulevez は声を出すのに、もっとも重要なことだと彼は考えている。彼は演奏解釈は教えないが、声に対する注意は適確で彼のいう通りの発声をすると、みごとに音楽になる。他の人の歌うのを私がいい声だ

Jacques Jansen のレッスンを受けて

な一と感心してきく声は、全て先生には「Non」なのである。少し高目で鋭く聞える声、それではないと「Non」と言われてしまう。これは正確に発声しなければ、のどだけの発声になりやすい。少しでも、のどにすれば「Non」先生の鋭いひびきをきいていた時、私は昔、コンセルヴァトワールの George・Jouatte の部屋に入って発声をきいた時の驚き、それを思いだした。日本ではちょっと耳なれないうすくて鋭い声、あのなつかしい声なのである。やっぱり此の発声法でないと *Mélodie* は歌えないのだと思った。しかしこれは *Mélodie* をうたうまでの訓練の課程で、歌をうたう時は、あのよくひびくまろやかな声になるのである。2週目から声楽の授業は午前中にうつされた。朝から声を出す習慣を失っている私には、早朝からのレッスンには、とてもついていけないと思ったので、おそるおそる朝から声がでないと申しでると、「習慣だ。すぐになれる」と言われてしまった。そう言えば、Jouatte のクラスにいた時も、授業は一日おきの午後2時から6時までだったが、先生はいつも午前中に発声練習をする様にといわれていた。声帯が目覚めない早朝からレッスンを始めないと意味がないということである。トレーニングのきびしさは、その一事でもってしても十分に、はかり知る事の出来るものである。フランス人でさえも、*Mélodie* の発声法はむづかしいものとされている。

Jansen は、「声楽家という職業は、とてもつらい仕事だ。一日休むと三日後退する。声帯が怠ける。毎日、毎日、声に挑戦しなければ駄目だ」と情熱をもっておっしゃった。また最後のレッスンの日も、なお一時間も授業を延長された熱意には、全く教師のあり方を、身をもって教えられた思いであった。お別れのパーティでの握手の時には、さらに「*Soulevez* を忘れないで！」といわれ、レッスンにかけられる先生の執念には圧倒される思いがした。

私は Jansen にきいてみた。「先生は、誰に習われたのですか?」「私は誰にも習わない。コンセルヴァトワールにいた時 Croiza と Panzéra について習ったが、彼等は演奏解釈は教えたが、発声については何も知らない。自分で勉強した。この年まで歌えるのは他の人より強いのを、もっていたのかもしれないが、毎日の練習だ。一日もトレーニングを休んだ事がない。」と怒ったようにいわれた。先日なくなった Mario・Del・Monaco も誰にも歌を習った事がないという事だから、すぐれた歌手は、自分で声をみつけることが出来るらしい。それ程、発声というものは個人的なものなのだと思う。

Jansen からは、歌に対するたゆまない努力と情熱、さらに教師のあり方を教えられた。私も彼の姿勢に習って、一生努力しようと心に誓った。

声楽のレッスンを文章で表わすのはむづかしく、あいまいなので Jouatte に習った毎日の目課の *Vocalise* の譜をかかしておく。

Jacques Jansen のレッスンを受けて

楽譜①

ni nin non nor nan 全てフランス語の鼻音

ni
nin
nor
nan

nor のあとで息をする

各鼻音で一回づつ音階を4回くり返したあと一点ドに入る。

アクセントはなれないうちは、一拍づつ 即ち Do Sol Re Sol
最終的には DoとReのみ。

楽譜②

ni nin nor nan

ni i-a on

アクセントは一拍づつ nor のあと息

i から a に変わる時にひびきは後にいかないこと。
この a は最大限の forte までいってファルセットに変える。

nan

下からの Portment をきかして。

父兄会から御援助を戴き感謝致しております。

Jacques Jansen のレッスンを受けて



此の写真はボアティエ国立音楽院の生徒の通用門である。入口の上にかかれている様に、フランスの音楽院では必ず、音楽とバレエのコースが併設されていて、パリのコンセルヴァトワールでは演劇のコースも含まれている。

リズムの基礎にダンスは不可欠のものであるし、オペラは音楽に演劇、ダンス、美術を含んだ総合芸術であるから、今後日本の音楽大学 特にわが相愛にこれ等のコースが、併設されるのが私の夢である。